

新刊
紹介

Books are the quietest and most
constant of friends; they are the most
accessible and wisest of counsellors,
and the most patient of teachers.

住谷悦治（同志社総長）著「同志社の一隅から」京都・法律文化社、B6判二八〇頁
定価五五〇円。

名山としてたええられる山のなかにはしばしば美しくすそ野をひいていているものがある。ひとはそのすそ野に立つてきびしい山頂の偉容にうたれると同時にすそ野の広さ美しさにみとれ、やがていつかはその果てにそびえる山頂にたどりついたものだと思う。住谷総長が五十年ちか教授生活・文筆生活のなかで書き残された千余篇の著述はわれわれにこうした名山のすがたを連想させる。日本経済学史・社会思想史の分野でのかずかずの先駆的業績は山頂で

ある。その周りにはすそ野をなすいくたの評論隨筆が広がっている。それは政治・経済・社会から宗教哲学・文芸・美術などの諸分野にまで及んで実に広い。そして人間の善意に対する無限の信頼と誠実な人柄が全篇にしみわたっていて実に美しい。

著者は、すでにこのような評論・隨筆のなかからいくつかをえらんで「私のジャーナリズム」「研究室のうちそと」の二書を刊行されており、本書はその続篇である。本書の特徴は前二書がいわば一教授、あるいは一文筆家としての発言であったのに対して、総長の重責につかれた著者が「愛する同志社への小さな置きみやげ」としてまとめられた点にある。

本書の前半「総長室の窓から」に収められた教篇で著者は新島先生をはじめ建学初期の同志社の歴史をつかった有名・無名のいく人かの人たちを生きた生きとよみがえらせている。読むうちにわれわれはいつしか古きよき時代の同志社の姿に著者とともにすっかり魅せられてしまう。しかし著者の意図はただそのことだけにあるのではない。むしろ著者はそのなから新しいもの、

の、したがってわれわれが正しく継承していかなばならないものを汲みとって現代の同志社のなかに生かし、さらに未来をになう人たちへの「置きみやげ」として残そうとされているのである。ただ全体としてみると軍国主義支配下の受難と苦悩にみちた同志社、著者自身も学問の良心を守るためもつとも苦勞されたころの同志社の記述が乏しい感じがするのは、本書が戦争を知らない若い世代に広く読まれることが予想されるだけに残念におもわれる。

「折にふれて」書かれた後半の部分で、われわれはより生々しい著者の姿にふれ、そのあたたかい人柄にみちびかれて誠実に生きることの大切さを教えられ、またそのために、必要な勇気を与えられる。巻中におさめられた林要教授の痛快な名文が本書に花をそえ、巻末の余録「大正デモクラシーの思想」が著者の豊かな学問的業績の一端をのぞかせている。(S)

エルネスト・チェ・ゲバラ著、神代 修（経済学部助教授）訳「ゲバラ回想記―革命戦争の旅」東京・青木書店、B6判二一頁、定価四五〇円。

この書物の書評を依頼されたときはゲバーラはまだ南米のどこかでゲリラを指導しながら健在であった。しかしこの原稿を書きだしたころはカストロをはじめ、彼の死亡を肯定せざるを得ないような情勢になっていたのである。

北米人(グリーンゴ)たちに圧迫されたラテンアメリカ諸国の解放のために立ち上ったゲバーラはキューバ革命の立役者フィデル・カストロの右腕と言われた。この回想記はキューバが北米人の配下でしかないバチスタを打倒するまでの記録である。

クアレグリーア・デ・ピオオクの戦闘からはじまるキューバの革命を飾らずに卒直にえがいたルポルタージュである。

誰ひとりとして超人的な英雄としては書かれていない。革命の進行中には苦しいことが多かったが、ゲバーラをはじめ革命の推進者たちは喘ぎながら一步一步成功への道を歩いていった。

しかしフィデルの命を狙う裏切り者もあった。これは天祐としか言えないようなできごとから成功せず、フィデルは助かった。

この記録にみられるゲバーラは決して超

人的な人間ではない。喘息の発作にも度々悩まされた。だが彼の三大陸人民連帯機構へのメッセージにも述べられているように、世界の被搾取人民である我々は今後どんな役割を演ずるであろうか?(中略)人民の一般的な戦術は、対決の生じているすべての戦線で間断しない、断固たる攻撃を敢行することではなければならない……のである。

まさにゲバーラの回想記はこのような熱烈な目的完成の意志のあらわれなのだ。彼は可愛がっていた「ちびっ子」には不断の移動、不断の疑心、不断の警戒心を持てと助言しながらも、恐らく一瞬のどれかの欠如によって彼の願いを完成することなく倒れてしまったのである。これは皮肉にもゲバーラ自身の問題であったかもしれないのだ。訳者もラテンアメリカ研究者としての立場から、ゲバーラの業績をラテンアメリカの将来にとって公正に評価しながら愛情をこめて訳出している。そのためかすこぶる明解な訳になっているのは注目すべきである。

(大島 正)

今中寛司(文学部教授)著「日本文化史研究」
京都・三和書房、A5判、四〇六頁定価一

二〇〇円(普及版一、〇〇〇円)。

文化史という名称には、社会経済史に対して芸術・思想・宗教といった特殊史を総称するもの、いわば下部構造の歴史に対する上部構造の歴史といった解釈がある。これもあながち誤りとはいいがたい。文化史の中には、たしかにそうした内容の歴史学もありうるからである。しかし、同志社大学には文化史学専攻という学科があり、文化史学の教授陣があり、博士課程以下学部生に至る五百名近い学生があるわけだが、そこに言う文化史とはそのような狭義の内容ではない。社会経済史はおろか、およそ人間の営みにかかわりのある一切の文化がその研究の対称である。しかし、そうした広義の史学をあえて文化史学とよぶ所以は、一に研究の理論・方法にゆらいでいる。

著者は広義の文化史学の方法論に立ってこの著述を成した。その求めんとするところは「歴史的世界における人間の主体的営み」であり、人間が共に生命をかけて成就してきた文化創造の過程であった。生きるということとは、主体的な人間が環境に対決し、既成の文化に挑戦する苦闘の連続に外

ならない。そして当面の敵である既成文化財の価値が高ければ高いほど、対決の結果たる創造は偉大なものとなる。「弱敵は相手にしてもはじまらない。文化史学は、このような価値の巨大な歴史的人間の過去の営みに対決する学問である」と著者は説いている。

科学を標榜する歴史学が陥りがちな歴史主義の無価値な相対論を救うものは何か、この書物は価値科学としての文化史学の方法をとくのみでなく、古今の日本文化の各分野についての著者自身の研究成果をひとまとめにした力作であり、同時に博学なるロマンチスト今中教授の面目躍如たるユニークな文化史通論でもある。

内容はⅠ古代、Ⅱ中世、Ⅲ近世、Ⅳ近代、Ⅴ史学方法論の五項に大別され、古代Ⅰ現代にわたるそれぞれの時代における顕著な文化現象をとりあげ、主体的人間の文化創造の原動力とそのプロセスとを客観的に考察しつつ、行間には珠玉のごとき文明批判をちりばめている。史学方法論の項は恐らく本書の性格上簡略に扱わざるを得なかったものと思われるが、できうれば独立の一

書として著者の御蘊蓄を御披露願いたいものと切望してやまない。(小川)

加藤正男(法学部教授) ほか著「現在法思想の潮流——二〇世紀の法思想家たち」

京都・法律文化社、B 6判三六四頁、定価六五〇円。

現在が法ないし裁判に対して求めているものに對する答が法思想であり、そして、「本書はこのような法思想の現代の状況をつかむためにつくられた。」法思想のこのような解答につき、人々は、「今日の時点において」「妥当な解決を提供している」のはいずれの法思想かという解答を要求するだろうが、しかし、本書は、「人々が自分なりの解決をみいだすためのサンプルを提供するという意味において」、その要求にそって作られたものとしておられる。

近代法思想—典型的には、次のようなものがある。すなわち、近代啓蒙期の自然法思想と「これにつづいて成立した概念法学の法実証主義」——の「現代的意義」(どう繼承され、どう批判されているか)を検討し、そして、現代法思想をとらえようとするのである。すなわち、「現代における自

然法の復興の動き」、「法学における《論理》や《概念》の評価」の問題、「大陸法学と英米法学からくる発想法のちがひ」の諸問題よりひきだされる論点ばかりでないし、それらはまさに現代の法思想の焦点とも「いえよう。」それらの諸点についてさまざまな角度から分析し検討しているのが、本書の中核であるとされる。——第一部基礎理論をつくった人たち「法哲学(ケルゼン《大橋智之輔》敬称略。以下同じ。)、ラートブルッフ《松尾敬一》、コイニング《小西美典》Ⅱ法社会学(エアリッヒ《石田喜久夫》、ウェーバー《中野貞一郎》、レナー《加藤正男》) 第二部現代のさまざまなアプローチ、Ⅲ理想主義のアプローチ(ヴェルツェル《金沢文雄》、ロンメン《阿南成一》、フラー《稻垣良典》、Ⅳ経験主義のアプローチ(ホームズ《矢崎光圀》、パウンド《八木鉄男》、ハート《恒藤武二》) Ⅴ現実主義のアプローチ(フランク《早川武夫》、ガイガー《佐藤節子》——サンプルの提示は、「内容的に共通するものをそれぞれ共通の項目でくくるという方法」によっているとされる。そして、「本書では二

○世紀前半において法および法思想の発展のためにつくした法思想家、ならびに第二次大戦後、そのすぐれた着想であられ、今日高く評価され、その点でリーディング・グループに属する法思想家の双方を中心にすえて、今日の法思想のサンプルをしめそうとしている。」本書の執筆者のなかには、「実定法学者」もおられれば、「基礎理論にうちこんでいる人たち」もおられる。以上の内容に、さらに、プロローグ、執筆者紹介、あとがき、文献リスト、法学史年表がついている。

総じていえば、難解な本というる。しかし、ことに、わが国の通説的法律学をひと通り理解した者、例えば四回生後期の法学部学生諸君にとって、読んで必ずうるところのある本といえよう。一読をおすすめする。(手塚)

入江節次郎(経済学部教授)著『帝国主義論序説』 京都・ミネルヴァ書房、B6版二五八頁、五六〇円。

帝国主義研究の古典といえは、何よりもまずレーニンの『帝国主義』が挙げられる。この書物が公刊されてからすでに五十年が

経過し、その間に帝国主義研究に寄せられた労作は膨大な量にのぼる。この長い年月と膨大な研究量を考えるならば、これらの研究がレーニンの『帝国主義』の上になにを積み上げ得たのか? レーニンの研究のいかなる点が不十分であってそれをどのようにに解決し得たのか? が問われるのは当然であろう。実証的な側面では多くのすぐれた研究がなされ、レーニンの時代とは比較にならぬほど豊富で精密な分析成果が示されていることが容易に確認できる。しかし「理論的研究」と称するものにおいては、発展の跡をたしかめ得ぬばかりか、その意欲さえ見出し難いものが多い。すなわち、理論の発展は土台となるものの批判的検討をつうじてのみ可能であるのに、『帝国主義』の解説と解釈、あるいはたかだか細部の補足と改訂に終止するものが帝国主義研究者の多数を占めていると言っても過言ではない。このような沈滞した状況を打開すべく、自己の体系構成を真正面から提示したのがこの入江教授の書物である。

さて帝国主義研究の最大の問題は、帝国主義の段階的特質をあきらかにするという

基本的課題を、『資本論』に示されるような資本主義の一般理論との体系的関連においてどのようにはたすかという点にある。

著者はその問題を、「生産の集積」を帝国主義の基礎的範疇として位置付け、これを起点とする上向的論理展開のうちに独占資本以下の諸概念を指定して行く、と言う体系構成において解決しようとする(第一章)。本書は「生産の集積」の規定を明確にし、それをもとに帝国主義の主要な特質(独占、歴史性等)を説明することによって、上記の体系構成を足固めすることをおもな内容としている。かくて第二章以下では「生産の集積」の具体的な姿としてコンビネーションにおける生産資本の特質がいかに独占等の概念内容を規定するかが示される。体系構成のかかる内容については紹介者も多くの疑問を持つものであるが、それは別の機会に発表することにしよう。本書がみのり多い討論のきっかけとなつて、帝国主義研究の従来の沈滞が打破されることを願って、読者の積極的反応を期待したい。(星野)